
機律士ボールトの後悔

ニコネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機律士ボールトの後悔

【Nコード】

N9425F

【作者名】

ニコネコ

【あらすじ】

「そうか。私はもう、要らなくなっただんだね」星のかまきりの声は、悲しむ様子はなく、穏やかさに満ちています。「ああ、よかったです。世界は良くなった」心の底から安心したようにそう言いました。（ある古びた絵本より抜粋）*****
*****千年を経て、あの人間とも知れぬ生き物は、もういないのだ。しかし、星の兵士が落とした欠片は、次の物語へと繋がっていく。

機律士ボールトの後悔

機源哲学……

機巧の電腦メインメモリに介在する情報が、生物に酷似した脳の α 反応を示すことから、機巧に有機物類の性体、反射反応が生成され、あたかも人間のような精神を持つとする研究理論から生まれた学問。主にリアリズムとリベリズムの大理論に分割され、前者は機巧が持つのはCPUメモリーの記録反復でしかないと主張し、後者は高次の電子回路は人間の脳構造を解読し終え、それを再現していると主張する。

その酒場では、暖色の明かりの下、大杯の酒を片手に談笑する客達の声で溢れていた。

巻き煙草の紫煙と、むせ返るような鼻を突く蒸留酒の匂いが辺りを満たす。

杯を片手で呷る客は男達ばかりで、テーブルの狭い隙間を縫うようにして給仕の女性たちが愛想良く動き回っている。

途切れることのない笑い声と、食器のかち合う音の中、端のカウンターで1人、杯を傾ける男がいた。

お世辞にも身なりの整ったとは言えない旅支度の格好だ。

つばの広い帽子を目深にかぶり、首にかかる髪はくすんだ赤を見せている。

肩に斜めにかけてベルトから背にぶら下がる古びたギターが、酒場の天井に吊り下がったオレンジの照明を鈍く反射させていた。

「——どうした、ボールト！　いつもの元気が無いじゃねえか」

男の纏う暗い雰囲気破るように、肩を叩きながら声をかける者がいた。

大きな体を旅装に包み、茶色の縮れた髪を後ろで結った大男だ。

腕や胴回りは人の2倍もあるつかという巨大さだが、それはぜい肉ではなく、鍛え抜かれた筋肉で引き絞られているのが服の上からでもわかる。

座っていた男は、肩を押さえて振り返った。

大男は右手に持った酒のジョッキを口に運びながら笑顔で続けた。

「そんなところで一人寂しく座ってないでよ。いつもの歌を聞かせてくれよ」

がはは、と巨漢の男は豪快に笑う。体格も相まって、愛想の良い熊のような印象を覚える。

ボールトと呼ばれた男は苦笑した表情を見せた。

「今晚は勘弁してくれ、ワロイク。そんな気になれない」

ざんばらな赤い髪の隙間から覗く、これもまた深紅の瞳が懇願を伝える。

「ん。どうかしたのか」

沈んだ様子を窺い知ったワロイクが訊いた。

しかしそれには答えず、ボールトは黙って飴色の酒の入ったグラスを軽く掲げた。

そのまま背を向け、背負ったギターの吊りベルトの位置を無言で直した。

夜は更けていく。

外には星空が広がり、静寂の中、聞こえるのは暗闇のどこから鳴く夜鳥の低い鳴き声だけだった。

四方を山に囲まれた小さな村で、人々は眠りにつき、立ち並ぶ家の明かりは既に消えている。

しかしひとつだけ橙色の明かりが窓から漏れ、中の人間の笑い声がかすかに外に聞こえてくる場所があった。

酒場「寝ずの葉」。

そこは、交易路の山越えの為に逗留する、様々な職業の男たちの休息と憩いの場だ。

「……みんな心配してるよ。あんたの元気が無いってんでね」

人声の絶えない中、カウンターの奥に立つ給仕の女性がボールトに話しかけた。

日に焼けた肌が健康的な女性だった。

大きな目と少々目立つそばかすが親しみやすい印象を受ける。腕まくりをし、慣れた手つきでテーブルを拭いている。

「……あっちのテーブルでエルロイが噂してたよ。ボートルトが沈んでるのは、投棄された美人の機械人器を修理してやって、そのあまりの美しさに恋しちまったからだって」

「あの野郎、出まかせを……」

くすくすと笑いながら言う女性のその言葉に、ボートルトは振り向いて遠くのテーブルを見やる。

幾人かに囲まれ、何やら得意げに話をしていた金髪の青年と目が合った。

まだ少年のあどけなさを残した若者だ。若者は、それとわかるとボートルトに笑顔で手を振った。

「くそガキ、あとで仕置きしてやる」

やや気色ばんでそう言うボートルトを、まあまあ、と女性がなだめる。

「いつもここに来る時はあんたが構ってやってるから、寂しいんだよ。その気が無いんだったら放っておきなよ」

「信じるなよ、リユー」

リユーと呼ばれた女性は、はいはい、と頷きながら空になった男の酒瓶を取り上げ、新たな瓶を置いた。

「でも本当にどうしちゃったのさ？　いつもなら一仕事終えてここに来る時は新しい歌曲の一つでもぶら下げてくるじゃないの。仕事がつまういかなかったの？」

『ボールトはいじけているのさ！　つい先日に関わった機械に、カウターパンチをくらったもんだからね』

突然どこからか快活な声がした。

子どものように高い、しかし奇妙にざらついてしゃがれた男の声だ。なにやら言葉の端々に、古いラジオのようなノイズも混じっている。

「てめえ、マンチエスタ。余計な事を言うんじゃない」

ボールトは不機嫌そうに首を後ろに向け、背負ったギターに言い放った。

リユーが背中越しに話しかける。

「あらマンチエスタ、いたの？」

『ハイ、リユー。久しぶりだね。何だよボールト、本当のことだろ？』

ギターが微かに振動して反論する。

反省のかけらも見えない軽薄な口調に、ボールトは小さく舌打ちしてグラスに入った酒を一気に飲み干した。

「天下の凄腕、機律士ボールト様でも、手に負えない機械があった？」

リユーが優しく訊く。ボールドは考え込むように少し黙り、そして「……リユー、機械つてのは、死ぬ時にどんな事を考えてるんだと思う？」

と、問いかけた。

「機械？ …… そうねえ」

突然の疑問に驚かず、顎に軽く手を当てて考える。

「そういうのはあんたの方が詳しいんじゃないかい？」

「俺は君の意見を聞いてんだ。……例えばフォーティーン、彼女さ」

そう言ってボールドは、トレーを持って歩く一体の擬人機を顎で指した。

スレンダーな女性の身体を模した、しかしやや錆びの目立つ金属の部品や関節が剥き出しのその擬人機は、顔全体を覆う模様布を揺らしながら丁寧に客に酒と料理を配っていく。

頭についた2本の長い動物の耳のような感覚器が、時折店内を見渡すかのように動いていた。

「機源哲学（ ）かい」

「機械に人間のようないかなんて古典的な考えはないだろ？ そんな古臭い議論をしたいんじゃない。どんな機械だって、そこそ造機塔遺跡に違法投棄された自律巧機だって、パーツに堆積した残滓記憶から形成された自我を持つてる。……フォーティーンは、造機塔で拾ったんだっただよな？」

「ええ、そうね」

「あんたが彼女を拾った時、彼女はなんて言ったんだ？ 命乞いか？」

「……ああ」

リユーは考え込むように手を顎に当てる。

「そうねえ。私がフォーティーンを見つけた時、特に何も彼女は言わなかったよ。ただ、私が見つめていたら、じっと見つめ返して握手を求めてきてね」

こんな感じで、と彼女は腕を前に伸ばし、身振り手振りで伝える。ボールトはそれを見ていたが、やがて苦い顔で下を向いた。

カウンターから離れたテーブルに座っていた男たちが、リユーに手招きをして呼んだ。

「リユー、もっと酒くれ。こっちのテーブルだ」

「はい、ちょっと待ってね」

明るく返事をする、リユーはカウンターの奥へと引っ込む。

「……」

ボールトは黙って、杯を口に運んでいる。奥から出てきたリユーが両手に酒瓶を抱え、テーブルへと足早に向かった。

「ありがとうな。悪いね」

受け取った男たちが赤ら顔で笑顔を見せる。

「いいけど、飲み過ぎて潰れたら助けてあげないよ。ここで寝なね、枕は酒瓶だ」

にやりと笑って言うリユーに、男たちは豪快な笑い声をあげた。

酒盛りの喧騒に混じり遠くから聞こえるそれを、ボールトは無視しながら杯を空けるペースを少し早めていく。

しばらくしてリユーがカウンターに戻り、洗ったグラスを拭き始めても、ボールトは無言のままだったが、やがてぼつりと呟くように言葉を漏らした。

「……そいつは俺のことを“殺し屋”と呼んだよ。“機械の殺し屋さん”と」

「……」

リユーは少し悲しそうに眉をひそめた。拭いたグラスを黙って棚に上げる。

「——はっ。ふざけてやがる」

ボールトは自嘲のために顔を歪めた。グラスを握る手に力がこもる。

「誰が殺し屋だってんだ……俺は機律士だぞ。……医者だぞ？ふざ

けるんじゃないよ」

そのままぐい、と残りを喉に流し込む。リユーは少しの間それを見つめて言った。

「あんだ、後悔してんのね。その機械を直せずに、殺したこと」

「……手遅れなのは、わかってた」

ボールトは苦い表情のまま酒を注ぎ足す。

「……そもそもが古代兵器なんてのは、中枢回路のイカれた発狂AIだと相場は決まってる。ましてや、機齡1000年……言葉が通じただけでも奇跡ってもんだ」

「でも——直るかもしれないって思ったんでしょ。だから今、そんなに悔やんでいるんでしょ」

「……わからん」

下を向いてボールトは呟く。

「……報酬に目がくらんだ訳じゃねえ……許したんだ。1000年も人を殺し続けた機械は、木端微塵にしちまうべきだって——死んで当然だって思った」

「……」

「人間が機械を憎むことを、それで機械が死ぬことを、俺は許した……」

ばそばそと呟くのを、リユーは黙って受け止める。再び空となった酒瓶を、カウンターの下へと下げた。

「全部が全部、あんたのせいじゃないでしょ。そいつが罪を重ねたのも本当だし、憎むなって言っても、どうしても何かを憎まなきゃ生きていけない人間だっている。たまたまそれが重なっただけだよ」

「……」

ポールトは沈んだ表情のまま、答えない。リユーは溜息を吐くと、手を伸ばしてその肩を撫でるように叩いた。

「……元気出して。あんたがくよくよすると、酒場全体の士気に関わってくるんだ。悔やみ終わりを見極めなよ」

「ざけてんじゃねえ……自分の仕事を悔やんだことなんざねえ、俺は……俺はな」

ポールトの口調が、次第に酩酊した者のそれとわかるようになってきた。言葉の終わりがなかなかはつきりと紡がれない。

背中ギターが唐突に甲高い声で言った。

『ポールトはいつだって感謝されたいのさあ。ああお医者様あ、直してくれてどうもありがとう』ってな！今回はそれがなかったから、いじけてんのさ』

「黙れマンチエスタ！バラすぞ！」

殺気立つて振り向くボールトに、微かに怯えたような振動を残してギターは沈黙する。慌ててリユーがたしなめた。

「ちょっと、マンチエスタ！……よしなよボールト、今夜は飲み過ぎだよ」

ギターを肩から外して拳を振り上げかけたボールトを制する。

「もう宿に戻りなよ」

「馬鹿言つな……これくらい、平気だ……」

酒のグラスが音を立てて倒れ、中の液体がカウンターへ飛び散った。

ぐらり、とボールトの上半身が傾く。

「ああつ、もう」

カウンターの外へと出たリユーは、椅子から転げ落ちそうになるボールトを急いで支えた。遠くのテーブルで騒いでいる若者へと大声で叫ぶ。

「エルロイ。エルロイったら！ あんた、噂話はそれくらいにして家へ戻りな。ボールトを宿まで送ってつておくれよ」

「……冗談じゃ、ねえ……俺は……俺の仕事はなあ……」

上半身を半ばリユーに預けるようにして、泥酔したボールトは尚もぶつぶつと何事が呟いていた。

「うつ、ぐ……おえ」

込み上げ続ける吐き気に呻くボールトに、エルロイが声をかけた。

「大丈夫か？ 珍しいよな、そんなに酔うなんて」

肩を担がれ、2人は暗い森の夜道を宿へ向かっていた。

辺りに電灯が無く、全くの闇の中だったが、道を知るエルロイの案内で進んでいく。

「なあボールト、今日はどうしたんだ？ 擬人器に恋したっていうのは本当なのか？」

「……つあんま……揺らすな……」

「え、何？ 聞こえないよ」

吐き気に襲われ続けるボールトは、答えられずただ口を押さえる。

「なあ、また機械を直した話、聞かせてくれよ。次の本に挿れたいんだ。今度いつこの村に来る？」

エルロンはそんな様子には構わず、きらきらと目を輝かせて話し続けた。

「南都の編集士との交渉が進んできてるんだよ。きつと今年も、一冊作ることが出来る。一つインパクトのある話が冒頭に欲しいんだよ。何かネタ持ってるだろ？」

「……」

まくしたてる若者に、足取りのおぼつかないボールトは無視しながら歩き続ける。

しかし、ふと見上げた先の光景に目を見開いて、思わず足を止めた。

「……どうしたの？」

訝しがるエルロイに取り合わず、彼は口を半開きにしたまま夜空を見上げている。

見上げた先、澄んだ濃紺の夜空には、びっしりと星々が広がり輝いていた。

数え切れない程の光が静かに、ただ圧倒的な美しさだけを湛え、宝石のように瞬いている。

漆黒の森と、2人の男と、その場にいる他のなにものをも凌駕し、あるのはひたすらな輝きだけだ。

「……きれいだ」

ボールトは真上に輝く、こぼれ落ちてきそうな星々をしばらくの間見つめた。

人間が縛られる煩わしさやしがらみを一切取り払い、悲しみも苦しみも喜びもどうでもいいものだと感じさせる、それは一方的で無秩序で、それでいて芳醇な眺めだった。

「……畜生……」

「え？何？」

そう呟くボールトの横顔は、何故か今にも泣き出しそうな表情をしていた。

悔しがる子どものような表情だった。

「ボールト……？」

「……何でも、ねえよ」

男はすぐに視線を落とし、また歩き出した。

「エルロイ。……明日の正午、宿に来い……リユーとフォーティーンも連れて……な」

「いいけど、なんで？」

「……墓参り、だよ……」

「墓参り？ 誰のさ」

「……知らねえ……」

「ええ？ 何だよ、それ——」

話し続けながら、肩を支えあつた男達は、ふらふらと宿屋への道を歩いていった。

満天の星空と穏やかな森の闇が、2人を静かに包みこんでいく——。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9425f/>

機律士ボールトの後悔

2011年9月6日18時11分発行